

岐阜県支部だより



- 1 巻頭言
- 2～3 支部研究会報告
- 4 事務局より

第12号 平成26年3月30日 発行

巻頭言 「今、学校教育相談に期待されること」

岐阜県支部顧問・学校カウンセラー 渡辺 澄子

平成25年8月、第25回総会・研究大会（岐阜大会）が開催され、酷暑の中、岐阜県支部の会員は一丸となって取り組みました。その結果、参加者からは岐阜県支部の熱意と行き届いた配慮に感謝の言葉を多くいただき、盛会裡に終わりました。私も久しぶりに参加して、多岐にわたる内容、多角的なアプローチ、高い専門性など多くの刺激を受けることができました。そして、学校現場を考えたとき、「今、学校教育相談に最も期待されていることは何か」について考えさせられました。

私は、時々、個別相談、ケース会議、研修会等で学校に伺っていますが、「気になる子、変な子」といわれる心の問題傾向を抱えた子どもの増加、不登校、いじめなど相変わらず問題は山積しています。先生方が日常の多忙な業務に加えて、子どもの心の問題や保護者との関係づくりにいたるまで心配りをされ頑張っておられる姿に頭の下がる思いです。一方で、ストレスが大きく、疲弊されているように推察しています。

このことは、文部科学省の調査でも報告されています。平成24年度に病気で休職した先生は8,341人、この中で心の疾患で休職している先生は4,960人（59.5%）で、最近10年間で2倍に増加しています。子どもにも先生にもさまざまな心の問題が出てきているように感じ、心が痛みます。

このような状況の中で、先生方には子どもの心の問題に早く気づき、即座に対応し、軽

度のうちに解決をはかることが求められます。そこで、教育相談担当の先生の出番が期待されます。

では、どのようなことが期待されるのでしょうか。私は、二つのことを考えました。

一つは、傾聴の大切さを先生方に認識していただくことです。子どもや親が悩みを相談するということは、考えに考えた末のことです。それだけに、相談を受ける側にその心情を疎かにしない配慮と熱意が求められます。それが傾聴です。「この子が悪い」「原因はこれだ」と決めつけしないで、「どんなことが出てくるかもしれない」と思って聴いていると、やがてその人が「よし、やってみよう」という気持ちを持つようになります。そういう関係づくりが全ての先生に大切だと思っていただくことが大事だと思います。

もう一つは、学校の中のネットワークづくりです。子どもは一人ひとりが個性を持っています。それに対応するには多くの先生の方が必要です。忙しくてゆとりの持てない一人の先生ではとても難しいことです。先生方が複数の視線を子どもに注ぎ、寛容で豊かな包容力を持って、それぞれの持ち味を生かしてかかわることが大事だと思います。

岐阜大会の分科会においても学校教育相談の役割を再確認していこうという意見が聞かれ、心強く感じました。

学校教育相談の充実のために、会員の皆様にご活躍されることを願っています。

☆ 支部研究会報告 ☆

◇第3回研修会

開催日：平成25年10月19日（土）
会場：岐阜女子大学

1. 講話

『学校をかえた生徒たち ～なりたい自分を探して～』

講師：足立司郎先生
(総合学園ヒューマンアカデミー名古屋校)

美容やエンターテイメント、スポーツ等、色々なジャンルを学ぶ専門学校の支援の様子について話を聞きました。

自己確立を目的としてTAテスト（性格診断テスト）やカウンセリングを実施し、一人一人の変化を丁寧に見届けていく体制が印象的でした。

個を大事に見てくれる環境の中でスキルを身に



つけ社会に出て行く学生の様子を聞いた時、「誰にでも道は開ける。」という希望を感じました。

2. 事例研究&実践交流

○問題行動の強い児童にたいする対応

～保護者対応・学校体制・担任として～

岐南町立東小学校 教諭 木村 由紀先生

○「仲間っていいな」と思えるチーム支援

恵那市立三郷小学校 教諭 幸脇 弥生先生

木村先生の事例では、プライドが高く何とか自分を認めて欲しいという思いが強いA男に対し、

①本人への支援 ②保護者への支援 ③校内体制について具体的にお話いただきました。プライド

を傷つけないような関わりは深い配慮が必要であることや卒業後の引き継ぎの難しさが課題としてあげられました。



(文責:佐々木 文枝).

◇第4回研修会

開催日：平成25年12月7日（土）
会場：岐阜女子大学

* 事例研究会&実践交流会

・「不登校傾向児童への支援の在り方 ～支援チームにおける養護教諭の役割について～」
垂井町立府中小学校養護教諭 小木曾有記先生
・「小中PTAと連携した中1ギャップ解消の取組」
垂井町立表佐小学校教諭 草野剛先生

どちらも興味深いものではありませんでしたが、前者の方に参加させていただきました。参加者は、養護教諭、特別支援学校教諭でした。

2名の不登校の児童に対する支援において、痛みに対する敏感さがあるなど、児童や児童を取り巻く環境、指導・支援経過に関する事実確認を行った後、「学校」という組織で動くことの大切さと、組織が機能的に働くためには、どのようにしたらよいかということを考えるのに、とても良い事例でした。

どの学校にも校舎の造りや人員配置という問題があり、必ずしも相談室が好ましい場所にあるとは限らないし、適切に人員が配置されているわけではないと思います。このケースの場合も同様で、相談室が教室の隣にあるため、保健室が相談室の役目を担っているという状況でしたが、居場所を確保するためにパーテーションを利用するなど、環境調整を行っていました。また、養護教諭なし、教育相談の担当者だけが抱え込むことがないよう、校長先生のリーダーシップの下、ケース会議を開き、起こりうるいくつかのパターンを想定して、各自の役割分担を明確にしながら指導・支援を進めていくと共に、日常的に情報交換も行うことで、誰かに過度に負担がかかるストレスフルな状況にならない配慮がなされていました。

情報交換を行うための記録の付け方など、工夫している点についての情報交換もできました。子ども自身の「心」が動き、自ら動き出すまでの間のフォローを養護教諭だけでなく、組織で機能的に行うためのヒントがたくさん詰まっている事例でした。

(文責 永田 智子)

いつでも どこでも だれでも 教育相談 ～マスク～

美濃市立藍見小学校 校長 古田 信宏

私たちが目指している学校教育相談は、特別なカウンセリング技能を習得した専門の相談員が、特別の場で、特別の時間を確保して、特に気になる子に対してだけ行うものではないと考えています。ごくごく日常の教育活動において、教師のちょっとしたしぐさ、表情が子どもの心理に与える影響は大きなものがあります。なにげない子ども同士の会話の中で発せられた言葉が、ある子どもにとっては大きな負担になっている事例は少なくありません。逆に、特に意図せずかけた言葉によって、子どもが勇気づけられるというケースも、数多く聞かれます。

私は今、日常的に行われている教師の指導・支援の在り方について、教育相談的に考え、意義付け、価値付けをしようと努めています。

この時期、インフルエンザの流行や花粉症への対策として、マスクをする機会が多くあります。そのことによって、口を中心とする顔の下半分が隠されます。すると、表情がわかりにくくなります。表情は、その人の感情を視覚的にとらえるのに役立っています。特に小学校低学年の子にとって、教師の表情が見えにくいことは、不安の材料になります。つまり、教師がマスクをしているときには、そうとう意識して目で表情をつくらないと、教師の思いは子どもに伝わりにくいのです。そこで、本校では職員会で、鏡を見ながら目だけで表情を伝えられるかという演習をしました。

あなたも挑戦してみましょう。簡単なようで、けっこう難しいものですよ。

*** 古田先生は、8月開催の第25回総会において第7回小泉英二記念賞を受賞されました。**

◇第5回研修会

開催日：平成26年2月15日（土）

会場：岐阜女子大学

1. 講話

「特別支援教育と教育相談」

鵜沼第一小学校 通級指導教室担当
学校カウンセラー 伊神 京子 先生

「特別支援教育」と「学校教育相談」の基本から実際までを、ご実践の例を挙げながら具体的にわかりやすくお話いただきました。

また講話後は、「通常学級における特別支援」、「Q-Uを用いたチーム支援」、「発達障がいの子どもの不登校への支援」などについて質問が続き、一つ一つに丁寧に答えいただいたことで、参加者全員があらたに理解を深めることができました。



2. 事例研究会&実践発表会。

○「特別支援教育コーディネーターとしての取り組みについて」

加納西小学校養護教諭 吉村佳子先生

○「教師不信緩和に向けて」

養老町立東部中学校教諭 森俊郎先生

森先生の事例では、生徒とのやりとりを起こした記録から、「教師がその生徒の問題解決能力を自然と引き出していること」「生徒は担任に対して、ふっと息の抜ける時間があるなど安心感を抱いているから、信頼関係を築けたのではないか」「年度当初からの記録に目を通すと、一貫した姿勢が見られる。ブレがないから安心できるのではないか」といった意見が交流されました。



またもう一つの会では、吉村先生の細やかな配慮にあふれる実践の発表をもとに、支援の引きつぎやチーム支援の在り方や進路の問題などについて、活発な意見を交流することができました。

（文責：小笠原淳・大坪一才恵）

事務局より

総括と展望

去る2月15日(土)に、今年度最後の第5回研修会が岐阜女子大学でありました。学校カウンセラーである伊神京子先生の講話があり、吉村佳子先生や森俊郎先生から提供していただいた事例をもとにした研究会も行われました。先生方の今取り組んでおられる実践を拝聴しながら、参加した方々も自分の実践を振り返る貴重な機会になったと思います。事例をもとにしながらか協議する大切さを再確認した次第です。

さて、同日午前中には、8月に行われた全国大会の実行委員会を行いました。この日をもって全国大会の実行委員会は最終となりましたが、15名の方に来ていただきました。内容は、全国大会に参加した方からのアンケートや実行委員の皆様から寄せられた意見をもとに総括をし、次年度以降の取り組みについて話し合いました。指摘していただいた幾つかの反省点は、今後の岐阜県支部の活動に生かしていきたいと思ひます。また次年度への取り組みに対する意見も以下のようにいただきました。

- ・年間5回ある研修会を「次も参加したい」と思える会にしていきたい。
- ・20代、30代の方にもっと参加してもらえる会にしたい。
- ・26年度は、第一土曜日に授業を行う地域があるので、研修会の開催日は、配慮していく必要がある。
- ・個の育成と集団の育成の両面を重視していく必要がある。それが研修できるような会でありたい。
- ・やはり事例研究会を大切にしていきたい。事例の書き方、まとめ方、発表の仕方なども基礎から学べるような会でありたい。
- ・参加した方に満足していただけるような研修会に努めていく必要がある。(内容の充実と共に研修会のもちかたで細かな配慮もできるとよい)
- ・学校カウンセラーの認定を行っているが、学校カウンセラーの役割が何なのかよく分かるようにしていきたい。
- ・SC(スクールカウンセラー)やSSW(スクールソーシャルワーカー)などと一緒に研修会を開催で

きるようにしたい。

- ・小学校、中学校、高等学校、特別支援学校など様々な校種の方が参加していただけるような会にしたい。
- ・会場が岐阜市近辺が多く、遠方の方が参加しにくい現状にある。遠方でも参加できる会の工夫をしていきたい。

話題にされたことは、できるだけ改善し、26年度の活動につなげていきます。

教育相談態勢(体制)は？

ここ数年、学校改善、学校改善とあちこちで、耳にします。今、各学校では何を課題にして何を改善していこうとしているのでしょうか。公立学校にSCが導入されたのが、平成7年(1995年)ですから、はや20年近く経ちます。その間、不登校児童生徒の数は微減ですが、大きく改善されたとは言えません。また、いじめの問題、体罰の問題、校内暴力の問題など、子どもたちを取り巻く問題も、多種多様に起きています。学校の中で起きる様々な問題にどう対処するのか、各学校の対応力が問われています。学校の中だけでは対応できないとして、外部専門機関との連携を求める声も高まっています。しかし、「外部、外部」と聞くと、「内部の体制」はどうなっているのか気になるのは、自分だけでしょうか。

各学校にいる教育相談主任や教育相談担当者はどう校内で活動しているのでしょうか。各市町や県単位での教育相談担当者が集まる機会が減っているだけに、教育相談を機能させる態勢(体制)が、どう整えられているのか気になります。

「学校教育相談」を標榜する本学会では、教育相談を機能させていく態勢づくり、つまり学校内部の相談態勢づくりの重要性を確認し、啓発していけたらと思っています。皆様のご意見もぜひお聞かせください。

(文責：事務局長 木村 正男)

日本学校教育相談学会岐阜県支部会報第12号

2014年(平成26年)3月30日発行

発行:日本学校教育相談学会岐阜県支部

編集:日本学校教育相談学会岐阜県支部広報委員会

ホームページ: <http://www1.ocn.ne.jp/~sodangif/>

E-mail: sodan-gifu@plum.ocn.ne.jp